

野津原方言集

後編 附録

こほれはなし



野津原方言調査会

はじめに……………	1	茶屋場……………	11
1 ふるさと		鋳物師釜……………	12
船のついた……………	3	豊後の岩戸……………	12
三国峠……………	3	のろし台……………	13
辻田堤……………	3	3 動植物	
瀬戸越え難所……………	4	姿消したウナギ……………	13
旗立て場……………	4	お伊勢参り……………	15
秋葉山……………	5	フツの血止め……………	15
鈴が滝……………	5	桐を植える……………	15
石橋……………	5	イモ洗い水車……………	16
迫ん谷……………	6	七夕とサトイモ……………	16
愛宕山……………	6	ナンテン種……………	16
野津原八景……………	7	梅の種……………	17
市場古市……………	7	アゼ豆……………	17
船を繋いだ……………	7	ホトトギス……………	17
寺町……………	8	フナの掴み取り……………	18
辻原……………	8	野津原神社の楠……………	18
天神免……………	8	里程木……………	18
道は影べら……………	9	ワラ逆さ葺き……………	19
瀬渡り道路……………	9	4 生活	
回洲とめぐす……………	9	焼米ついた水車小屋…	19
たまりみず……………	10	流れ出た大水……………	19
2 旧跡		かくし田……………	21
迷い道……………	10	諏訪学校に引いた水…	21
石だたみ……………	11	カヤブキ屋根……………	21
矢の原お陣屋……………	11	大掃除……………	22
鶴崎街道……………	11	勉強嫌った……………	22

アタ汁洗たく	23	清正公の遺徳	32
サナボリ	23	浅内長者	32
共同浴場	23	牛を見にくる	32
間口を量った税	24	親がそして家が	33
免税された水田	24	歩く日近く	33
頼母子講	24	祝言は第二の人生	34
木の内水路	25		
お歳暮	25	7 子供	
芋がま	25	亥の子	35
出針は禁物	26	ママゴト遊び	35
お日待ち	26	手まり唄	35
		お接待	36
5 食べ物 赤飯	27	塩をつけて	36
武家屋敷の水	27	塩アン餅	37
ヤセウマ	27	餅をほしがる	37
ダンゴ汁	28	亥の子唄	37
行李弁当	28	ホーキで決めた名前	38
一汁一菜	28	おぼこ娘	38
鏡餅	29		
寒のもちつき	29	8 労働	
オハギ ボタモチ	29	松根油は国の為	39
湯つけウドン	30	迫田	39
ブエンが運ばれて	30	法泉寺橋	39
ウンスケ焼酎	30	青タタミ入賞	40
		荷がおれた	40
6 人		99谷	40
一華和尚	31	半夏至水	40
法師とヤカラ	31	水けんか	41
貸した人の心意気	31	田植え唄	41
山岡鉄洲の書	32	配水所の水	41

小作人	42	宇曾山修験場	51
石だたみつくり	42	めぐす不動	51
墓掃除	42	千巻心経	51
のろしと役割	43	糸棚観音	52
街づくりの人たち	43		
茶を植えたのは	43	10 夢とロマン	
ムチ焼き	44	瀬戸の砂まき	53
寒行	44	肥後領飛び地	53
水車	44	水番小屋の花	53
小作米	45	清正公の御輿	53
木挽さん	45	カンカラ餅	54
葉屋さん	45	鬼と天狗勝負	54
		芝かき払い	54
9 神仏		力を貰った男	55
久住系にあった寺	47	七瀬の友	55
智滝の水	47	双石城今昔	55
光明が輝いた	47	砂礫岩	56
奥の院あれこれ	47	方言の中の言葉	56
諸物集合地	48	清正公大山車	56
野仏	48	御座岳	56
南無地藏菩薩	48	地から生まれた	57
鷲が城主護神	48	天狗の住む山	57
南無四国88所巡り	49	鶴見山	57
山峰経塔	49	夜ばい	57
記念大師堂	49	神楽を練習した場	58
コウシン塚	49	バクチ穴	58
逆修墓	50	名前つけた矢	58
毘沙門まつり	50	酒は白鶴	58
加藤神社の鳥居	50	落人たちの夢	59
地藏様の前垂れ	50	★ おわりに	60

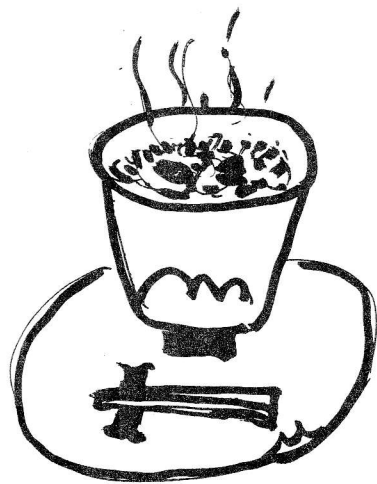
方言調査こぼれ話

方言調査をしているうちに 多くの方々のお話やらアドバイスも受けて 後編の発刊にこぎ着けました。この間にも後編には入らなかったが 勿体ないような話題が一杯あり その中から幾つかを別の こぼれ話の資料から抜粋した物と 合わせて纏めました。方言調査に取り組んだために 集まった大切な宝だからです。

約160編ありますので ふるさと 旧跡 動植物 生活 食物 人 子供 労働 神仏 夢とロマン の分類にして 案外知らないものや ありふれているが気づかぬままに 通り越したような話などもいれました。今は昔のような話もこれから何年か先には 又面白い話題になるかもしれません。

調査にご協力頂いた皆様に 改めて厚くお礼を申し上げます。

※ 所によっては内容が異なる物もあると と思いますがご了承して下さい。方言も地区により物によりかなり 違いもあります点もご理解下さい。文によっては多少言葉を付け加えています。現在使うといけない言葉も少し入っていますが 方言集の性質上お許し下さい。



方言調査会編集

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

シ 三 さ と

こぼれ話 〈1〉 ふるさと

船のついた……川船ん荷物う運ぶ船頭ん 竿ん先い野花が流れちいたんか 一輪ちいちょつた。日焼けした顔ん笑みは周りん緑にゆう調和しち絵になる。『船が入るど』 方言も含めた大声が聞こえる。荷物を下ろすし 積むし 川辺の小屋はちよいと賑わうち。船が着く所じゃき 河船ち言うよーになっち久しい。

まとまつた地域かる水便を使うち 他とん交流は大けな役割う果たしちょつたごたる。

〈2〉 三国境

むかし諏訪 谷 野津原の接点じゃつた峠 人呼んで三国境ち言う。幹線道としち豊後文化だけじのーじ 西部九州の文化も通過したのだろう。江戸期にゃこの地帯は肥後領じゃつた。そんな頃あ多くん人がここじよこい 北に湯布 鶴見 夏の涼風は格別。南に九州連山を眺め花咲き鳥歌う頃は 心を目を慰めてくるる。人情の濃やかさが周りの人たちに残っちょつち 土地柄かもしれん。

三国境と言う場所が人う育てたんじゃろー。

〈3〉 辻田堤

昭和28年に募集した野津原八景の 4位にはいった辻田堤は昔は塩見城のあった当時の内堀じゃつたらしい。そんなと拡大されち今んごつなつたごたる。今は世利川井路になっち管理 大田 矢の原 辻原なんかん水田を賄う。非常ん時に抜く栓は松じ作る。水んほとぼしる様は見事 そんな下を栓尻ち呼ぶ。明治んはじめに土手が決壊しち大田が大水になつた。そんな被害は野津原まじ広まつたち

言う。大田ん家もかなり流れち 下羽じゃ庭じ手が洗われたち言う。4位の記念にナンキンハゼ200本を 植えコイ フナ ハエ ウナギも養殖しち 遊園地にする予定ち当時んニュースは伝えたけんど。

〈4〉 瀬戸越え難所

瀬戸越えするにゃ陽のあるうちに 夜の瀬戸越え生命がけち 言うくれ一難渋しちよつたそ一な。馬が足う踏み外し上りつむると又谷に ほらけおつる。山の寺が瀬戸に向いちよつためち解り 向きを変えたらそれかるは馬も 落てんごつなつた。幾百年も過ぎち土地も低くなつち瀬戸越えより 土取越えが楽になつち 表に出るにゃ便利になつたごたる。そん頃あ太田 瀬戸 雨川 塩出野んコースが 多かつたようじゃ。瀬戸ん地蔵様が話うしち くるりゃ もつちとゆう解るかんしれんが。

〈5〉 旗立て場

賀来の祭りがはじまると旗を立てる習慣になつちよる。9月1日から11日まじ柿の木の台地に 青年しが立てた旗が風に靡き そん度に丸い環が柱にあたつち音う立つる。作柄を祈り豊作を祈念する素朴な行事じやが 若いしの交流も鶏飯う炊いちドブう 飲む 束の間の憩い。

夏の草きり時期にゃ若い娘が好きなしと 朝しめし合わせち一緒に山に行く。草きりの楽しい山にゃ恋も芽生えち 躍る胸の高鳴りに悦びも味わう。



旗を下ろしち打ち上げうしゅうや……若い人はすぐ決まる。人の心が通じあう時そこには明日の 素晴らしい飛躍も約束される

〈6〉 秋葉山

気品のある形をした山で どこか眺めてん変わらん姿。諏訪富士とん呼びよった。古松の行儀ゆう並ぶ山ん頂きにゃ 火伏せ神の秋葉様おまつり旧盆23日にゃ 中腹じ山の形した火を焚いち供養踊りうしたき 火災の発生がなかつち言う。昭和ん始めに忠魂碑が建てられた 日清 日露 シベリア戦争じ戦死した人を奉る。

昭和22年指令じ爆破したが塔は崩れんじ 28年に再建された。野津原八景の7位に入ちよる。今は町立公園にもなちよる。

〈7〉 鈴が滝

水しぶきが晴天の日には虹になるち言う。高さ10メートル深さ5メートル。繁見城主が入道しち法泉寺を開き こん滝う修験場にしたとか。滝の中程に日輪月輪の刻みがあり 小さなウナギが生息している。鈴のように昇るので名前がついたとか このウナギを食すと腹痛を起こすと言う。

野津原八景の2位にはいった。

〈8〉 石橋

矢貫かる伊塚に上る道にかかる大けな石橋がある。一枚石でかけられて参勤交代当時に利用した。二つの支え石にも工夫がこらされち 大水んときにゃ水はけもゆう出来るごつ 工面されちよる。そん頃ん技法にしちゃ素晴らしい出来。川そこも石板んごたるき大水を逃がす工面 何よりも大事じゃつたんじゃろ。橋を渡り伊塚の石だたみを 上ると野津原が眼下に眺められ 宿場町の灯がチラチラと人恋うように 灯っていたのだろ。熊本からなら4日目の宿明日は いよいよ鶴崎に。

〈9〉 迫ん谷

大田と福宗 今畑に通じる幹線を迫ん谷と言う。城があった頃の
武将や供の者たちが城に入り 前を通り他の国に行く往時が偲ばる
る。人の語らいが山肌に響き多くの人が 話題をもって各地から
入ってくるだから諏訪は古くから 生活文化が高く人の暮らしも
秀でていたごたる。くぼ地に広い場所があるき館があったんか そ
れとん多くの人が営みしちおったんか。

猪んヌタバん脇にゃひっそりリンドウん花が咲いちよる。隠し田
のそばにゃ石をぐわゆう積んだ跡 やっぱ器用なしもおっち自慢し
ながら 石積みしたのじゃろう。リンドウは取って帰ってもツカン
とか やっぱ野の花は野におけじゃろー。ここにありゃこす長う咲
く そりーあやかち城じ過ごした人たちは じっと眺めたか。

〈10〉 愛宕山

1062年に鷲が城が築かれ慶長5年に焼き払われるまじ 栄え
たが府内の小京都としての名前もあった。三面に川を巡らし南の平
地を前庭に 行政をしたことも頷けるける。仕向武士が長崎や熊本
にここから出張したとか 西方に武家屋敷もあり一帯には古い碑や
井戸も残る旧跡が何か語りたがるごたる。

当時の石段がほんの少し残り 駕籠を担いだ人たちの行列が登る
光景が走馬灯のように浮かぶ。築城の際に孝女おきくと鷲を人柱に
したことから 鷲が城と言われるごたる。昔の物語
には悲しい運命が秘められているが 平和の影には
常に人の犠牲がある そげなこつー思う時幸せな今
に感謝せにゃ 罰があたるで。



〈11〉 野津原八景

昭和28年3月当時発行1年を記念した 野津原八景の募集があつちそりゃー人気をゆうだ。15日間募集しち3853人が投票。一位が愛宕山公園が1092票。2位鈴が滝で755票 以下3位原村神社737票 辻田堤434票 塚野冷泉289票 宇曾岳神社242 秋葉山166 貝殻岳48票 となった。

こんほか順に下詰慰霊塔 たまりみず峠 大田88か所 今畑発電所 よこどう 大峠 御所の森 日向山 塩見城 稻荷神社 辻原橋 胡麻鶴橋 野野台 田吹金比羅 日向金比羅 以上。3月の23日に抽選して投票者のなかから 30人に記念品 8か所には賞金と苗木が贈られた。

〈12〉 市場古市

権現白山神社 平野祇園神社のお旅所があつた 古市は市場ともいいよつた。物と物との交換するアキナイ 庄内やら犬飼かるん物が運びこまれち 川を上つた海産物もがいとあつた。市が立ち神社んお旅所は そんなたちの集まりには似合いの催し 人と人の知恵ん触れ合う心は昔も今も変わらんごたる。ある日人があつまりそしち離散する 野津原の市場はそんなことにスタートしたんじゃろー。現在の本町の東地域んごたる。

〈13〉 船を繋いだ

海産物を積んだ船がはいると 米やアワ 大豆 麦を入れた俵が船つき場に待つちよつた。魚 昆布なんか貴重品じゃき何日もかけち 運んじくる。帰り道は足取りも軽いなーちよこつと儲けたき。何百年も続いたけんど人の言い伝えかる 残され呼ばれちよる船平

高台んう野津原う見渡す野々台はまさに高台 道う行くと山と山
とんあい間の里に続いていたんじゃろー。大田地区ん小舟にゃきっ
とそん頃 船が着いちょつたんじゃろう。

〈14〉 寺町

野津原ん一角に古くから寺町ち言う所がある。家のなかった広っ
ばにお寺が出来た そん周りに小さい家が少しずつ点在した頃かる
みんなが寺町ちよんじ 家がよきーになったき権現村寺町ちなっ
た。明治になってんそんまま名前が残り 家がふゆると東と西に別
れ それかる東に又ふえちとうとう5つの班に なった。

〈15〉 辻原日当たり

南向き前面に山を北に山を背にうけち 年間を通じち日当たりが
いい。水にちった不便じゃが高齢者ん多い所 古い歴史もあっち
5000年も昔かる 人ん行き来も多かったごたる。
日当たりんいい面ぬ利用しち水路を引き 米つくり
にゃ揚水ポンプの設備も着けた。ゆう働く日当たりが
いい 何でん実ることから 長生きするしが多くなっ
たんじゃろう。



〈16〉 天神免

一の瀬河原を中心に川の水も多く天気が続くと 洗濯物を干す人
も多い。天神様を奉りそれ以外の物はない事から 天神免と名づけ
られちょつた。小高い丘が愛宕山から延び権現からも背延びしち
ここに集まる。大水になると牟田まじ入りあとじ出来る寺町ん北側
まじ 河原じ水ん美しい赤坂川は人が集まれる 広い場所でんあ
ったごたる。

〈17〉 道は影べら

庄屋さんのふれじ新しい道う作るき 山おわけちよくれち申し出があった。貧しいが欲うはらん男は庄屋さんの 言うこた一気持ちゆう受けた。隣ん欲深え男は『代わりん畑うくるりゃいい』ち言うた。庄屋さんなお礼を言うち望み通りにするち帰った。

欲うはらん男は山は影じゃき影べらん畑じいい 欲ばりん男は日当たりんいい畑がほしいち。やんがち道の測量がはじまった。道つくり木を切ったき影べらん畑は日当たりがゆうなっち 日当たりんいい畑は日が当たり過げち 苦勞することになった。そしち道はそん山ん影う通ったき便利がゆうなった。

〈18〉 瀬渡り道路

一の瀬を渡った行列はお陣屋を出発すると二の瀬を渡り 新貝から川づたいに東にすすんじ山際に渡る三の瀬を越えた。大水じ越せん時もおち無理うしち渡った。アベト道ゃ山の急崖に道があち足う取られち川に落てたりしたき 道中安全の祈願もしたち言う。

山際かる御堂前まじ行く四の瀬渡り 瀬を渡らんじ殿坂かる中村に出ち胡麻鶴にくだる道も使う。御堂かる胡麻鶴に出る五の瀬渡りじ 下り少林寺前じ六の瀬渡りをする。八幡田から七の瀬を渡れば光吉で七瀬をすべて渡るこち一なった。とのことじゃ……

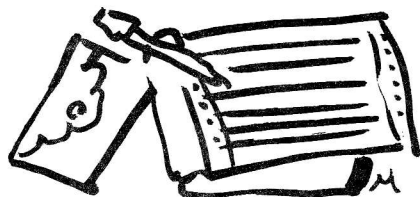
〈19〉 回洲とめぐす

かわが曲がりくねっち水勢じ出来るツキマワシン反対側にゃ 砂が運ばれ洲が出来る。川広がり出来ることから回洲がはじまった。上詰んメグスも当時の谷川にゃそげな形成が あったんかんしれ

ん。長い年月の間に地殻も変動しち幾百年もすげたき。村と村が合併しち同じ名前じゃ不便ち片方は回洲に 片方はめぐすにしたらしい。

〈20〉 たまりみず

水に恵まれず畑どころじあったここにゃ ちつと一雨でん大事にしち生活しよった。溜まる水う大切にす ち言う水に対する執念はあそろしいまじ一なつちよつた。その思い考えが伝わり大切にす気持ちに そんな地名になつちしもった。やんがち工藤三助が井路を引いちかるは一遍に水に恵まれち 昔ん苦勞が嘘んごたる夢ん世界に。



旧跡 1 ★迷い道★

繁見城には間道が幾つもあつち 折々に外地からの人を近づけないために うまく道を外す方法がとられた。一步間違うと回り道をしながら 数時も過ぎて元の道に出るとか。知恵を生かした守護人のアイデアが後世にまで生かされちよつた。とすればトンネル 空間 ジャングル も多種多様にあつて 少し動かすことじ全くわからんごつなつちしまふ。起伏ん多い山じゃき大木一本が見なれた土地んしと 初の進入者にしちみると運命づけられたんじゃろー。

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

旧 跡

2 石だたみ

太田と原村の接する一角に『石畳』と呼ぶ地名がある 何と響きのいいことか。参勤交代時代には石畳が敷き詰められち 今でんそん名残りが残っちよる。人の心う大切にした地名 先人の苦勞した石道ういつまでん忘れんごつ かんしれん。

3 矢の原お陣屋案

はじめは矢の原にお陣屋を作る予定じゃつた。が水ん便利が悪いきチット下った野津原に決まったごたる。ここは各地かる集まる要所じ防衛上かるもよかったけんど。そり一霜どけやら人の集散するき病気ん心配もあっち。諏訪郷んしにゃ表玄関にしたかったじゃろが。太田を座敷にしたかったらしいが。

4 鶴崎街道

熊本かる鶴崎まじにゃ他領も通行させちもらう 久住かる岡領天領そしち野津原に出るぬ『鶴崎街道』ち言いよった。久住…長湯かる日出に出るぬ豊後街道ち言う。今市も年月の間え道もちっとずつ変わり 元は北側う通りよったが江戸時代に 現代ん道になったごたる。水が不便じ火事も多くそんため鍵の手道になった。行列ん宿泊ん時は外敵から守るには大きい役割う果たした。

5 茶屋場

旅んしが長途の途中じ休憩するんが茶屋場 お茶を貰い草鞋も買うと言う便利屋の店。すしや食べ物もあるき腹ごしらえも出来た。田舎には珍しいミカンがあつたり 木の椅子に腰うかけち話も旅ん道連れ世は情け。『もちっとじ野津原じゃな』茶屋の娘が『すぐで

もう』と指さした。盆地野津原に泊まって行くのか 日が山にかかり影が長くなっち来た。上っち来たしは一休みしち今市まじか 風に揺るる茶店ん旗ももう古うなつちよる。

6 鋳物師釜

瀬口の風は夏は涼しいが冬は身も凍える寒さ 城から近道を下ると真っ赤に焼けた鉄に火花が散る。ここでは金物の修理をしたのか 上詰では刀剣を作った記録が残っている。地理的土との関係やら諏訪中心地の奥の一角として ふさわしい場所であろう。松炭を入手することも水を利用することも まさに理想的。当時としては目を見張るような技法だつたかんしれん。そんまた呼び名をそんままつけちやるんも心にきー。

7 豊後ん岩戸

君よ知らずや我が故郷の七瀬川の上流に造化の神の鑿の跡 豊後岩戸のそびゆるを千古の昔地変のために 自然に生まれい出たるか 水なしたる業なるか見事に切り立つ岩 うつをの端なる松林うつをの川を見下ろして辻原ぼるを真向こっに 立てられし豊後の岩戸七瀬の川にゆあみせし この村人も今になお不思議の扉の存在を知る人なきど口おしや。

死して地獄に落ちる時間魔の王の立ち賜い三国の峠と豊後の岩戸を見しことありやと問い賜いその時岩戸を見し人は 極楽浄土に送られて岩戸を見ざるその人は 地獄の責め苦に合うと言う。古いよりの伝説を今は大方消えはてて自然のなしたる神秘の業を知る人なきど恨みなる。人もし七瀬を溯り千古の秘密を開かしめなば造化の神も喜ばん。 ★野津原夏子〈野津原在住〉の記述から

はるか鶴崎が手の届くように見える 野々台には参勤交代の折に連絡する『のろし台』があり役所や武家17人が勤務しちよつた。石う敷き詰めた屋敷ん周りは竹垣根があり 冷たい水ん出る井戸もあつた。役人以外は側門かる出入りう許され 役所に一般人が出入りする時は草履う脱ぎ伺いを立てたち言う。そん南約一町程ん場所に『のろし台』がある。灰トグうくり抜いた穴じソコジ煙りうあげちよつた。雨ん日でん濡れずに出来た。

役宅ん周りは肥後方式ん石垣を積み 中の沢には高くもない近くん山の出水が湧いち流れちよつた。井戸のほかイノコもあり屋敷奉公んしが水かたげ 岩下 船平 荻の鼻に通じる道もあり 六地藏もワカサレに立っていた。北に抜けると谷村 庄内 挟間にも。



.....

動植物 (1) 姿消したウナギ

太田川にゃ魚ががいと住んじよつた。巧みに竹竿じ釣る 穴つりテボつけ 夜ぎり ところがある年に急におらんごつなつた。なしか あんまり取りすぐるき川下りしたウナギが相談したんか。川の神ん崇りか 川祭りうしち暫く自肅したやんがち姿う見せたとか。

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

動植物

自然の摂理を壊した天罰か異変で稚ウナギの 生まれが少なかったのか毒物を使用したのか 共存の必要性をまざまざと思い知らされたこしじゃろう。

〈2〉 お伊勢松

桑の木鶴の台地に長寿した松がある。風に葉をゆすり お伊勢信仰かる伊勢に参れぬ人ん為に 分霊を祭ったのじゃろう。朝夕の祈り地域の発展を祈念したんじゃろー。高さ17メートル横幅20メートルを越す。根を張り葉を繁らした古松は地に葉先が 下ろすと大事変があるち言う。日清 日露 支那事変なんかにそれが現れたごたる。別名根上がり松しも言う。戦中にゃ松根油も取ったき傷めたんじゃろう。枯れた姿は哀れであったが。

〈3〉 フツん血止め

田んぼん仕事中にゃ怪我にフツうもんじ青汁うつくる。血止めになるきすぐゆーなるち習うた。不便な時代でん厳寒のそれでん畦にあるき 目ざとく見つけちひつつくる。新芽が出るまじゃ古葉は落さんじ 天はそりゅう与えちくれちよつた。灸のモグサにも根元んやわらしい分わ 殺菌力もあるき使られたごたる。風呂に入れてんいいし餅につき込むと こりゃまたうめー。

〈4〉 桐を植える

娘盛りう見するごつ桐の花がふくよかに香る。娘ん生まれた時に植ゆると嫁入りタンスが間にあうちいよつた。まつすぐ延びたそん先に枝が別れフジ色ラップ形の 下向きの花の香りは いじらしい娘の心を察しられるよう。そん桐も今頃はあんまり植えんごたるが時代の移り変わりは 人ん心まじ変えち行くごたる。

〈5〉 イモ洗い水車

井路の流れを利用した丸い箱ん水車　ゴロゴロと水の力を受けち回る。中にサトイモが入つちよる。皮むきすると手がかゆーなるき水車は　そん代わりうしちくるる。水車ん中じイモがこすりあい周りん竹んに当たり結構ゆうむける。こん皮はこんもうなっち　いつんなかめーか流れちよる。

水車ん軽やかな音水の流れリズムを奏でる　農村ののぞかな一面ぬ垣間見る思い。サトイモの利用度は高い　それにも増して白くなつたイモのうまそ々なスタイル。可愛い娘のようで思わず食欲もそる。

〈6〉 七夕とサトイモ

七夕の短冊に願い事を書く　そん墨うするのにサトイモン葉に乗った露がいいち言う。朝日にまるで水銀のように美しく輝いちよる水　葉をゆすると左右に揺れて動く。葉っぱを叩くと一か所に集まつち素直に　そん水う硯に受けち色短冊に書くと　夢とロマンが天まじ届くごたる。

〈7〉 ナンテン種

各地を巡拝する人が難を転ずると荷物の上に　乗せたナンテンの実が権現でトキを開いている時に　ポロリ落として溝に入ってしまった。お茶の接待を受けた娘の髪に一折さすと　真っ赤な実が黒髪に映えた。心を込めて差し出す茶の代わりに里に根づいたナンテンは　地元の人に大切にされ長い年月の間に。今では家の周りを囲みその人たちの無事息災を　念じながら人の心も慰めてくれている。

〈8〉 梅の種

梅を食うたあと舌で種を回しながら口の中を左右に動かす さわやかに そん種を割っちたぶる。天神様に罰う受けるち食べんごつしよった。こん中には素晴らしい栄養素があるとか 見直されちよる。一の瀬河原天神免にゃ陸奥の国ん梅が植えられちよつた。お粥にゃいいパートナー藤原系の移動じ北国かる 移されたのん万病ん薬じゃつたきか。

頭痛ん時コメカミに貼ると熱を取る 青梅に塩うつけち食うた子供ん頃 漬けちえーと色がち一た頃ハンドかる引き上げち 食うた時代。欠かせんもんじ竹ん皮にニギリメシにゃ 絶対いる。戦中の日の丸弁当も今思や懐かしい。

〈9〉 アゼ豆

田植え準備ん畦ぬりが済むとアゼ豆植えは子供ん仕事。金づちじポコン打つ豆を入るる馬糞や灰をかくる。蛙に食われん為じゃ。検知された水田かる広さに税がかけられた。こん僅かな畦に実った分にゃ税はかからん。ほんのちっとーじゃけんど食料になるもんな何でん植えち 足しにした時代じゃつた。小作農家の懐を助けちくれたもんじゃ。

〈10〉 ホトトギス

昼夜鳴くなー1000回鳴いちえーと一食にありつける 厳しい運命ち言うホトトギス。冬は南に渡り春に帰ってくる 自分じゃ巣を作らんじウグイスん巣に生み付けち育てちもらう 習性があるき食べ物には恵まれんのかん知れん。そげな人間もあおるごたるけんどなえ。干に一じゃあんまりむげねーな。

〈11〉 フナの掴み取り

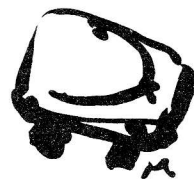
田植えが済むと井路にフナが上ちくる。牟田井路に夕方になると若えしが賑やか 中かがみになち両手じサグリながら 手先にフナがピリッと触る。咄嗟に掴むと大物が手の中え 持ち上げたらパシーとはねち落ちた。すかさず5 6歩さがち又手を入ると そんフナはじっと側じよこーちよる。田植えよこいん何よりんご馳走 若い人ん心は弾み水ん中んだりも 一遍に吹き飛ぶごたる。

〈12〉 野津原神社ん楠

日露戦争ん戦勝記念碑ん周りを整備しち 植えたんが楠の木。若い芽が出ち葉を落とすんが楠 防虫ん役も果たしちくるる。子供ん頃家にあつた苗を植えたち言う人が 当時ん町筋ん様子を語る。大半はワラブキの町 瓦葺きん家をヒヨケち言う。火除けん意味じゃつたんじゃろー。火除け土手は高さが二間の防火山じゃつた。火災ん時火を食い止めちよつた。

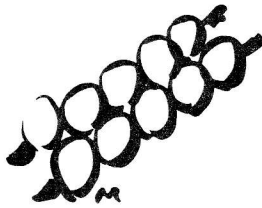
〈13〉 里程木

道の里程には時として大きい木が植えられよつた。道しるべん役もしちくるる。木陰をつくり一服するにゃ格好ん場所 クヌギ エノキ 松 杉 なんかも。岩下にも名残りが残る旅をするしが時間の役割も。まさに生活の知恵じゃつた。夏ならここまじとか冬ならこき一日が傾くとか。生活のサイクルに生かされた里程木も 年月ん流れに古い歴史は塗り替えられちいく。



〈14〉 ワラ逆さ葺き

今年は小麦からががいと一取れんじゃつたき 逆葺きにしゅう。
屋根のつくろいは早うせんと雨が漏りだす。ワラを使い逆さに重ね
ち短い間なら結構間にあうき 今年はその手当てをするこち一した
。屋根んあっちこっち見ゆる白いな品な悪いが 応急的にゃ仕方あ
るめ一。差し替えちつかの間に西の空が曇る 二百度雨に濡るりゃ
逆葺きも周りに馴染んじ 一息つける。



★★★★★★★★★★

生活 1 焼米ついた水車小屋

溝刈りするにゃ惜しいけど排水が悪いき ちっと刈り取っち焼
き米にする。夕暮れに刈りとった稲をあやしち大けな釜じいる。す
ぐ車に持ちち行きツクと香りのいい焼き米が出来る。ついたら初を
離しちサべたら出来上がり。大きい歯車を水ん力じ回す水車には
荷の出来るのう待っしも話が弾み 娘が子守がてら来ているのも珍
らしい。三組した娘が泣きはじめて背の子をドドルと 水車の音に
あやさるるようにむ眠ってしまう。

2 流れ出た大水

明治のはじめに生まれたしが聞いた話 堤が切れち大水が出たと
伝えられる。1800年頃ん事地鳴りがしち途端に水 石 木 草

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

生活

が一瞬に走り流れた。まさに瞬時の出来事であり山に逃げる者
大声でわめく者その中を牛が流れニワトリが飛ぶ。神の怒りか仏
の罰か天災地変か その頃はさまざまな語りが流れたらしい。当
時の技術 天水貯めの設備であったとすれば 無理からぬ事だっ
ただろう。

3 かくし田

繁見城の隠れた田には流れる水をうまく利用して 米づくりが
されていた。水は冷たいがおいしい米が出来たであろう。隠れて
作る食べるその味は別格だったに違いない。田んぼの後が残る今
の地形から想像すれば 人が住み欠かせない食料を少しでも確保
する 苦勞が感じられる。冷水日照不足でも勞した報いがある
人の幸せだろう。さらに畑としてキビ アワ 麦 ソバ豆なども
植えたであろう 石垣のあとには人の勞苦と人を勞る美しい花も
咲いたに 違わない。

4 諏訪学校に引いた水

美しい水が蛇口を捻ると出る 掘割のイノコから水を運び掃除
した日に比べて なんと便利重宝なことか。鶴山から土管を繋い
で途中で水の流れを調べる タンクもついて皆で大切に守って
いた。道脇を牛馬が通っても学校の水道と言うだけで 皆が気をつ
けていた。学校の横に大きいタンク そこから竹の樋で引かれた
水 手を洗い感激した。

5 かやぶき屋根

小無田に幕末に建造したと思われるカヤブキ屋根の家 人の温
もりが感じられる。かつては直入郡石合のうち宿であったとか。

天秤棒を担ぎ商いの人 入れ葉屋さんなどが 一夜の宿にしたのか表ではウドソバが 作られて『めんや』の名前が残っている。殿様行列と店とのバランスも今見ると懐かしい 絵を見るように。朝地の方を上無田と呼び 今市でも南の方を上と呼ぶのも肥後熊本との関わりか。

6 大掃除

夏の盛り暑さをよけると雷雨の訪れで涼しさを 大掃除の季節でんある。タタミをツボに干し床下を掃き出すと 一銭銅貨を時折見つけ出す。ノミが追いたてられち足もとかるはいあがる。叩く畳かる出るホコリ 上手に敷込み雑巾じ拭くと日の暑さが全身に伝わる。

大掃除ん検査にゃ村ん駐在巡査がサーベルん音うガチャガチャ いわせち区長と来た。まっ白い服んボタン一つはずさんじ 日覆いをかけた帽子を脱ぐと暑さに湯気が立つ。『床ん下も掃除したか』笑顔も見せず一口言うと『美しうしました』と答えため一聞きえ一と笑顔が出た。検査済みん紙を門口に貼るとホット安堵感も。勿論不合格は次の日にやり直しであった。

7 勉強嫌うた

竹刀踊りに裏山から切った女竹で間に合わせた 古老たちは学校じいい点を貰うと親かる叱られた。頭がいいと上ん学校に行くと家ん働き手を失うき。汗を流しち田畑を守る農家にゃ 子供の力は足しになっちょつたから。農家の子は農家を継いじほしい当時の親の気持ち。切ない胸の内じ勉強がでくるとほんとは困る。

しかたね一子供も本当は勉強がよだきゅーもあるきどつちも よかつたんか悲しい時代でんあった。ましてや小作人は尚更のこと。そげな時代じゃつた。



8 アク汁洗たく

灰のアクを垂らして貯めた汁は洗たくにもってこいの汚れ落としと 鹽に取って澄み切ったアク汁で木綿衣類の 汚れ落としには欠かせない。古いじだいから灰はアク汁のほか 磨き粉としても食器 仏具磨きなどに使われた。生活の知恵を地に行く古老たちは アルカリ成分がきつと効果をあげるんじゃろう。真っ白い物時代には不向きかも 先人の残した知恵は再び世に出るのは。

9 サナボリ

田植えが済むと苗を洗い神棚に供える。無事終了のあいさつと豊作を祈念する 苗半作といわれるだけに心配りするわけ。早稲上りがサナボリになったとか その苗も3か月過ぎれば白く枯れるが 盆の仏具磨きに灰をつけて使う。神に供えそして仏の役にも立つ。先人の生活の知恵かも。

サナボリには餅をつくり世話になった家に配り 共にその労をねぎらい感謝する。小麦の取り入れの後の田植えだけに 農業してない人にも小麦の取り入れに喜びを 分かちあい日雇い人には餅を子供にも送り 牛馬も長い水の中の仕事の疲れを癒してやった。

10 共同浴場

井路の水を上手に利用して取り入れた 共同浴場があった。当番は交替で沸かしその代わり一番に入る。7戸の人たちの裸のつきあいの生活が続いて 古老には先にすすめ年若い嫁さんは終わりになるが 水を十分に使い毎日入るから汚れはない。「おじゃんカンなどげーな」「いい加減じゃわい」「アア」と疲れを癒す欠伸が出て 和やかなムード。はじめち来た嫁さんが入ったクドんはたじ

婿じょうが火を燃やしちよる場なんか 心和む思いが醸し出され
ちよつた。

1 1 間口を計った税

街道に立ち並ぶ家は間口が狭く奥行きが長い。課税が間口によつたので土地を買う時でもうまく土地割を 利用した者や実力の差を垣間見る思い。古くからの財産家は実力もあり間口も奥行きも広いが そうでない知恵者は間口を狭く奥行きを長く 取ってあった。江戸期になって出来た町は間口のわりに 奥行きがひろいのはその為である。

1 2 免税された水田

世利川井路開通の時に畑が田になれば米づくりは 楽になるがその反面税が高くなり水田に反対する声も。地主も税の払込が多くなり小作人に買い取りを 頼む傾向も出た。税対策として五年だけ税を半額にすることになり やつと話合いもついた。米の出来には畑作の苦勞よりずっとよくなり 水の有難さをしみじみ味わった。

1 3 頼母子講

昔まとまった金を工面するために頼母子講があつた。寺などの世話で大きいものから 小さい地区での楽しい企画の方法など 欲しい時に優先して使われる利点がある 勿論利子をつけての払い込みをする訳だが 結構有意義に使われていた。高いヒアイで貸すご隠居もいたが一般には 手軽に出来て皆が楽しく出来るのが喜ばれていた。くじ引きの方法も多種多様で思わず ため息をもらしたりの会になつたことも。

14 木の内水路

飲料水には事欠かないが大火災ともなれば それを救う事は難しい。江戸期に入ると加藤清正は町作りに力を入れ 道幅を広く取り 用心水を流すことで初期消火につとめる工夫を。700年頃に権現に水を引き残り水を集めて 木の内を回して古市に出し お陣屋にも構築の必要上水防に生かした。水量の少ないのを増やすために さらにセキを設けて井路の開発に努力した。苦勞したことを領主に申告したが認知されないまま死去。その子が28で引き継ぎ申請したこと76回 その偉業がやっと認められたのが慶應7年。

子子孫孫まで香料と下付の証明をされたが 一回だけで明治時代となりその功績は消えてしまった。200年あまり資材をつぎ込み守ってきた井路は そんな記録は知らぬように美しい水が流れている。流域50ヘクタールに及び当時を忍び立てられた記念碑 でも始めからのくわしい事は書かれてはいない。大正7年 昭和30年被害にあい再建の繰り返して 現在の井路が完成した。

15 お歳暮

正月に貰うものにお歳暮がある 挨拶に来る人が決まって家族の下駄やタオルを乗せて 子供用に合わせた下駄を見ると日ごろは草履をはく子供も 小躍りして喜ぶ正月の風情によく調和している。時にわネルの腰巻 別珍の足袋もノシ紙の回りからはみだして しばらく床の間を飾る。

16 イモがま

南を受けた木の下なんかん崖を利用しち『イモがま』があった。秋に掘ったイモも小麦からん敷いた中に入れ 通気と霜よけ寒よけ

の土うかけちワラトビーをかくる。防寒した貯蔵庫春先まじ食糧
ん一つでんあった。床ん下やらモミガラやらイモがまかる 引っ
ぱり出えち生んままかじり遊ぶ 子供ん口ん端ぁ黒く輪をけーち
よつた。

17 出針は禁物

出かくゅうかち思うとコハデが取れちよる。そで口がホコロビ
ちよる。針うつまめばいいが『出針は悪い』ち口やかましいう言
わるる。慌てて修理してん仕上がりが悪い 針の残る危険もある
ましてや日頃ん心配りがたらん。人ん心の準備う論したもんじゃ
。

18 お日待ち

前ん晩かる泊まっち太陽に感謝する祭り 万物の恵みを受ける
気持ちん現れじゃつた。座前に集まり山海のご馳走と餅を供える
。集まるしも湯を沸かしち身を清める。夜食にはぜんざいがふる
まわれ夜明けに 豊作と作物に感謝して別れる。元々地主が小作
人に頑張って田畑を作らせる 感謝のふるまい酒じゃつただろう
が 帰りに家族に餅を持たせた心配りに 小作人もはりこんで働
く気持ちを醸しだしたんじゃろう。厳しい小作人の暮しが忍ばれ
て情けの多い地主の心意気も。



野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

食べ物

食べ物 〈1〉 赤飯とナンテン

赤ん坊が生まれたお祝いに赤飯を持って来てくれた。滅多に食べられない赤飯重箱にいっぱいつめて 鮮やかなナンテンの葉がその上に添えて奥ゆかしい。ナンを転ずるとか薬効もあり『贈り物で充分気をつけていますが もし腹痛を起こしたらナンテンを煎じて治療してほしい』旨の心配り。

家族が揃ったら皆で祝ってあげよう お返しには白紙やお茶を入れて返す。『何事ありませんでした』と白紙が語りご馳走でしたとお茶が愛でる。心にくい仕種が人情と夢の中にロマンも感じられて……

〈2〉 武家屋敷の水

鷲が城全盛期の頃にゃ日東に武家屋敷があった。白山権現や天徳寺なんか含めち6寺あり 特に井戸水は冷たく格別じゃった。井戸水を汲むツルベン音が道行く人に 一層水とそれを汲む美しい女性を連想もしたようじゃった。広い屋敷の中に命を繋ぐ水は長い間大切にそれに物乞い人にも裏口で そっと与えたとか。夏の暑さに身も心もすっかり涼しさわ味わい 感謝したことだろう。田んぼのあちこちに残る遺跡にはそんな人の心の花が そっと咲いているよう今でも。

〈3〉 ヤセウマ

小麦がよき一取れたき食い延ばしに助かる。たまにや変わった物とダンゴにこねち延ばすと茹でる。そり一きな粉をつけち独特な味歯ごたえ、夏ん暑い時荷物いっぱい背に坂道を上った馬 暑さに舌をペロペロ出しちよつたんが 今作ったのにゆう似ちよる。ヤ

セウマ本当にピッタリん名前 皆も頷いた。きな粉をまぶしたヤセウマ夏の食べ物にゃゆう似合う。

〈4〉 ダンゴ汁

豊後ん名物じゃがこねち割いち入れるなー ちょいとコツがいる まあ本当のダンゴ汁かんしれんな。イリコン出しにあり合わせの野菜がゆう似合うき。そりー栄養もある消化もいい炊きだちもいいし冷てゑのも 温めてんこれ又うめー。風に靡くごつ薄う延ばすきーピラとん言うが そんくれーしきりゃー人前じゃな。

〈5〉 行李弁当

柳ん細木を使うち編んだ弁当箱アワ飯が一杯つまっている。小さい梅が二つ並び白黄赤の取り合わせがよい。風通しがよいから適当に水分を除いてくれ それでいて乾きは押さえる。夏の山仕事旅行には欠かせない入れ物。味噌漬けを脇に入れて背にかるえば 形こわれせず食後の水洗いも簡単。人間の生活に奉仕してくれる。

〈6〉 一汁一菜

米う売っち生活する 小作米を納めち残りう売っち収入は限られちよる。常日ごろかるん質素な生活がしいらるる。盆正月祭り葬式以外は米飯ん生活なんか考えられん。味噌汁に季節ん漬け物 冷てゑ麦飯に煮付けでんありゃご馳走。夜食はダンゴ汁が常食たまに鶏川魚 それでんバランスも取れちよつたんか 土に生まれ土に生きた人間の根本かんしれん。



〈7〉 鏡餅

嫁の里に正月帰りに持っていく鏡餅 一臼分ぬそのまま丸餅にしち そんな太さが家ん財政も解るち言うき。無理しち作ったしもあつたそーな そりー鏡餅は日頃世話になったしやお医者さんの家にも届けよつた。長う置くと固うなるき早めにワラキリじ切っち 水餅したりする習慣もあり 丸い餅が円満じあつたんじゃろう。

〈8〉 寒の餅つき

寒に入っちついた餅はカビが生えんち言う。こん日は早朝かる家族が総出じつのが当然のこと。つきあぐる度に座敷に敷いたムシロに並べるんは子供ん仕事。近所んしが加勢にくると酢醤油につけたススリモチ 竹や椿ん枝につけた花餅も年寄りしが作る。旧正月は一番寒い頃小作米も出えち畑仕事も一段落 そんな頃餅つきは風物詩でんある。

〈9〉 オハギ ポタモチ

村ん辻じ口論しよる オハギじゃ いやポタモチじゃ。いろいろ説はあるが言い分もあるごたる。春に作るのがボタンがあるきポタモチ 秋はハギがあるきオハギ。いやコシ餡がオハギ つぶし餡がポタモチ。とか……餅米で作るんがポタモチ うるち米ならオハギとか でんと構えたのがポタモチ 小型がオハギ……

もちっと……大型がポタモチ 塩餡がオハギ 砂糖餡がポタモチ 白砂糖餡がオハギ 黒砂糖餡がポタモチ と多種多様の見方呼び方がある。ポタモチと餅がつくのが餅米を多く入れたので 言うのだからが レンギについて柔らかくして餡をつける…ポタモチかも。

〈10〉 湯つけうどん

盆に尋ねた農家の奥座敷手打ちのうどんが出された。温かい湯につけてあるうどん胡麻の入ったツユに 箸ですくって食べる。珍客この食べ方が解らないで困っていた。『こうすくいあげて食べて下さい お湯はお茶がわりに』と説明すると遠慮するといけないから 下がった。

始めは珍しさとおいしさに思わず箸が進む 残り少なくなり皆食べては失礼と『お茶がわり』を思い出し茶碗ですくうと 一気に湯を飲み干した。適当な塩加減とのぞごしに 残すと失礼と固いことでした。

〈11〉 ブエンが運ばれて

籠に入れられ天秤じかたげちくる魚屋『ブエンジャキドウナ』声かけられち少し食わせな一ち言う。府内かる4里も離れちよると 滅多にブエンは食えん。味見をすりゃ高うでん米と変えちくるる。久しぶり一身にち一た自慢顔じ食うたしも ゆう考えちみりゃ高えもんでんあつたが。当時としちゃ最高の味じゃつたんじゃろう。

〈12〉 ウンスケ焼酎

盆が近づくとウンスケじ焼酎が来る 纏め買い徳利やら瓶やらじ分ける。香りが回りに立ちこめちこぼすと『勿体ねー』酒好きなら恨めしそうに見つむる。盆と正月ぐれえはち買うぬ通いにつけち年末に払うきなち口約束が出来る。小作米が引っぱり足らんごつ背にあれもこれも かるわされちよる。それでん焼酎ん口開けん香りなんとん言えんな一。

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

しと

寛文年間の頃母が子宝に恵まれずに悩む挙句に 三夜の待ち日に願をかけることにした。毎夜バケツに水を張って生まれ石の上で三夜様に祈った。一心が通じた3年3月にして恵まれたのが一華和尚と言われる。生まれ石は太田に三夜様行事も残っている。

そして笑いとエピソードも残した人。和尚であると共に人の知るべとしても 多くのひとに慕われた。ひっそり座った姿から力持ちで激しい世代を 駆け巡った人とは想像もつかない。「トンチ者」「肝をつぶしたお殿様」などは有名。

No. 2

法師とヤカラ

法師とみて後つけて行く影二つ 『私に用事なのか』返事もなく襲いかかる 人に嫌われ行き場もないから山中にこもっていた。ところが散々な目にあった二人反省したのか自戒したのか 再び人に迷惑をかけぬべく諭されたのか 回りの崖を切り落として高台を作り法師に そこに住んでほしいと。崖下回り一帯をこのヤカラ一族で守り 地域の人たちと力を合わせて素晴らしい里を。遊牧民が行きづまっての果てであつたのかしれないが 法師の教えを聞き入れた正道に戻った心もさすが。

No. 3

貸した人の心意気

貧しさに二円の借金を申し込んだ家屋敷を書き込んで。でも利子だけ押すのが精一杯じ何年も過ぎた。でも利子だけはきちんと払う律儀者 貧しさを親子がしみじみ味わい終戦戦後に変動。二円の返済はすぐ出来る現世の相場に合わせて 払う事を相談したところ二円で結構と言う。きちんと利子を払った心にご褒美だったのか。

No 4 山岡鉄舟の書

この人の書いたのか高歩と鉄舟の印がある。千葉周作について武道の奥義を極めた 無刀流を創始した人。幕末の立て役者 維新後は静岡 伊万里 明治4年には侍従となりあまたの要職を歴任した。その人の書が野津原に。

No 5 清正公の遺徳

清正の後に細川が入った野津原20年あまりの領民との 結びつきが強くて行政に反対 ついに細川もその気持ちを汲んで大切に扱ったと言う。その一つに清正公堂があつて建設差し止めであつたが 解かれ和合が実った。明治に入りいち早く野津原神社を建てて 祇園神社と合祀された。清正公堂のある法護寺の石垣は肥後方式に 積まれている。

No 6 浅内長者

浅内に長者がいて山の護りから生活まで すべて執り仕切っていたとか。情けを乞う人には門を開け仕事に困る人には助けもした。子供が絶えて山の向こうから養子を迎えた。嫁には地元でよく育つた娘を添わせて幸せに暮らしたと言う。それも今世で人に施すことの報いだらう。長者屋敷として水を利用した米づくり 水田開発や 広域住民の為に力を注いだとのこと。

No 7 牛を見に来る

馬屋ん前に着飾った二人が立つちよる 牛う見にきたち母娘は 急いじ家に帰る。嫁ご見のことじゃけん『牛は気にいつたかえ』 笑いながら母に誘わるるまま座敷に通された。気忙しくこしらえ

た娘が茶を運んじ入る。耳元まじ赤うしたそん純情さが二人にゃ気にいつたごたる。

見送りキドまじ出た娘は家に引き返すと 不安と嬉しさが交差しち胸さわぐ『せかんでんいいゆつくり考えち』母親はまんざらではねーごたる。父親は仕事じ夜話に弾むじゃろう。仲立ちが足しげく通いだしたなーゆうまでんねえ。

No. 8 親がそしち家が

仲立ちが5回来ち帰り道じ娘にそっと耳打ちした『どげーな』承知かとの意味 娘は黙っていた。嫌いではない親が決める家と家が関わる 娘も親かる決断の言葉をいつ聞くか待っていた朝 『どげーするか』夕方仲立ちが来ることになっちよる。相手ん事も母親かる聞いた20を過ぎ早い人は里帰りん姿も見た。乙女心は悩ましく揺れち。

『どうしゅうか』『どうしゅうかじゃねー好きか好かんか』ぶっきらぼうに父も 離したくない早く嫁がせたい 気持ちが複雑にゆれるのじゃろう。『返事してんいいか』『うん』えーと言うた。

No. 9 歩く日近く

『お前好きな人おったんな』母に聞かれち迷うた。本当はおったけんど相手は知らん 親の反対まじと口に出せんまま。『うん』おもたい返事に母もどうにもならぬ。『あんしならいいち思うで』母にそう言われちやえーと落ちついた。米つきに水車に行くと友達も来ちよる『あんたいいな』うらやましかったのか 『うっとーいつまでん残るじゃろう』『そげなこつ』言ったものの友達に対する心くばりに過ぎん。『あんた晩のこつー聞いた』『ちゃーそげんこつー』 母にそれとなく聞いたが ここでは言葉お濁した。クルクル水車は快く音響かせち動いちよる ひととき。

近所んしにお茶入れする日が来た 親戚んおばさんたちが加勢に来る。頭つきん魚お焼き少し濃い目の化粧もする。着飾った人たちが昼過ぎに揃って屋敷に着いた 『長い間お世話になれました』何年前かこの土地に来た人たちばかり 同じ気持ちで迎えられて過ぎた年月。同じ気持ちで送り出す 女の運命とは言え親のもとを離れて 他家に嫁ぐそこの家族になる。やがて子供を生みその子が嫁ぐ社会の輪廻。

あん日に牛見に来たきこげな祝いに結びち一た。全く知らんしと夫婦になることが運命づけられちよる。水車じ羨ましいち言う友達もやんがち相手が決まり 自分以上な幸せ者になるかんしれん。夜んこつー心配しちくれたけど ゆーしたもんじそん時なりゃ相手が 暗すみでん具合う………性の悦びも味わうことが出来る。



野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

こども

7 ★★子供★★ 1 ……亥の子

旧の11月の亥の日に豊作に感謝しち餅う供ゆる習わし 多説まちまちじゃが感謝しち来年も良い年を願う な違いねえ。小作人にゃ思い通り餅もままならんき せめて出来秋ぐれーは子供にゃ一緒に食わせて一親心か。こげな行事を通じち貧富ん差を隠したんかんしれん。餅じ豊作祝う子供ん顔は天真爛漫。

亥の子槌う屋根にはほたりあげたり蜜柑や柿ん木にぶらさぐる 馬屋に吊すも ささやかな願いを託した素朴な行事。地主も日ごろ頑張る小作んしに甘みの効いた餅うしこーしち 背負う子やら病人にも持たせた。唄う童歌もさまざまじゃが 元は祝い歌感謝の気持ち歌じゃろう。悪たれ歌は日ごろの恨みか辛みか。

★★子供★★ 2 ……ママゴト遊び

夕立雲が芝原ん上に立つと待ちどおしい雨が降る。あたりが暗くなつち思うと筵干しがセワシュウたたまるる。急いじ納屋にかかえくーだ途端に大粒ん雨 木の葉に当たる音が耳に。ママゴト遊びん女ん子が可愛い手じゴザお引つぱりくーだ。軒下に飛び込むんとイチドキ ガラガラ雷がなりでえた。泥うはねあげち降る雨に野菜も稲もそしち人間もひと息つく。うらめしそうに空お見あげち手にしたな ママゴト遊びんご馳走んシソん葉に巻いたカンナの赤い花がひとときわ美しい。

★★子供★★ 3 ……手まり唄

あんた方どこさ 肥後サ 肥後どこサ 熊本サ 熊本どこサ
センバサ センバ山にわ狸がおってサ ソレヲ獺師がアミチャで捕
ってサ 煮てサ 焼いてサ 食うてサ うまさのさっサ。無心に唄

ながら手まりうつく。童たちん気持ちはきつと肥後文化の流れを汲むのか 肥後時代を挟んで東に西に文化が流れた接点じゃつたんか知れん。三っ組した子供が袂をヒラヒラさせち 時にゃ子守しながら そん半纏の裾にテマリ隠す仕種は 風こそ冷てえが微笑ましい。

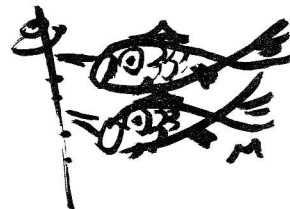
★★子供★★ 4 ……お接待

お大師さまの施しを皆にと 春はワラビン頃タケノコ ミツバ サンショウが入る。お大師様を飾った前に香が立ち子供が 接待もらいに来る。子守りながらん子にゃ肩越しん子にも。出かくる時拭いちもろ一たか美しい顔おしち『ほら二人分』世話役のバァサンが握らする。『オーキニ』口にいれち丸呑みしたんか目を白黒させちよる。

自分は食わんでん皆に施す大師の心にそうよう 接待することが自分が人に助けられるものである。般若心経を唱える年寄りたちには 素朴な行事でも余韻を残して受け継がれる。久しぶりに出会うふれあいの場でもあり。お互いに健康を確かめ合う一時かも。

★★子供★★ 5 ……塩をつけち

育ち盛りの子供にや夢の世界がある 春先にサトガラ ギシギシ 青梅 トーマメをむき カンネ マカヤは甘え ツバキン蜜リンドン粉 ツツジ ガラメ 野グワ グミ アケビ さては柿が色づくとちぎり 稲が実入りするとトイモ ナス キュウリと子供ん世界じゃ食べるもんが多い。清める為ん塩じゃつたんか消毒ん為か自然の中に育つた子供は逞しい。



★★子供★★ 6 ……塩アン餅

亥の子についち廻ると餅うくるるきオトシにゃ はいりもうさん
ごつなる。甘い餡もありゃーきな粉うつけたの 中にゃ塩餡もあっ
ち口んこえた子供は半分食うとポイ。それでん塩餡餅でん作るるし
はまゝ幸せ てーげーは子供ん貰つち帰つた餅う 目を細めた親も
おったもんじゃ。

★★子供★★ 7 ……餅う欲しがる

子守うしながら親ん帰りう待つな一当たり前ん生活 まだ小作人
な恵まれちよつた。祭りでん正月でん餅も食えれたが そんな餅も食
えれん子供もおった。子供たちが夕暮れ近うなるとお宮ん側 辻ん
道じ遊び喧嘩しちはだけたりん繰り返し。別れ際に大きい子がこん
めえ子に『餅くれんか』と要求する。こなされめーごつ小走りに家
に帰っち二つ三つオトシにせりくうじ 引き返す。

こつそり渡す餅こん子供たちん夕飯ん足しになるんか 百姓はダ
ンゴ汁でん腹いっぱいあるが それがもう習わしになっち親も知っ
ちよる子供ん世界。

★★子供★★ 8 ……亥の子唄

大黒さんと言う人は一人じ俵ふんぼっち 二でニツコリ笑うち三
で杯さしおうち 四っ世の中いよいよ五っいつでんご鬣尻に 六
つ無病息災じ七つ何事ないように 八つ屋敷う買いひろめ九つここ
に止まっち 十じとうとう納まった ドッサリ祝うちょくれ。

★★子供★★ 9 ……ホッキ名つけ

男ん子が生まれた名づけになつちがいと名前が出た。どりーするか迷うた。古老いわく『紙に買いちコヨりにしちホーキじ釣りあぐるがいい』 とん由。集まったしが思い思いに書くとコヨリ まとめち座ポーキじ撫ぜた。三つち一たぬ一ちと揺さぶち数う減らしち 最後に残った一つが名前に決まった。

★★子供★★ 10 ……おぼこ娘

夏の訪れにホタルう追い捕まえた幻想的な灯を 白紙に包んじ窓辺につるした。雪明かりとは又異なった点滅するホタルん光に 美しさを感じる年頃 夢とロマンがいつしか現実の物となち 夜空を眺める。嬉しさと不安が人生の縮図となるような連想。

墓参りん日早う風呂に入れられユカタを着せてもらう。墓まいりにゃそげーする習わしを護ち来た家の人に 汗を流しながらなで自分はと ふと思う。精霊を迎え送る大切な日だからと言う。人それぞれにあるのだかなとも。

近くじヒトギまきがある。行きたいでも行けない。無理にお願いしたら父親が不在と断われた でもその父親が夕方早く帰って来た。『行ってよい』と許されて化粧をちゃんとして 『ヒトギヒライは化粧して』不思議でならないが家を建てる人に 礼を尽くした意味の由。



野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

方働

8 ……労働 〈1〉 松根油は国の為

繁見城跡には古松が風になり人の訪れに土産のマツタケを 与えていた。されど古くは戦いの場でもあり血に染まり 歴史に秘めた花がひっそりと咲きもする。戦争末期には燃料不足の代用に松根油を集める 婦人子供老人の姿が国策に駆り出されて 苦勞の明け暮れだった。松の幹に傷をつけてしたたる液を集める。

乙女のモンペ姿防空頭巾が戦に破れた無縁仏に 勇気づけられるように汗の滲む体に鞭うって 今日勝つための頑張りが続く。油はあまり使われずじまいとか青春を犠牲にした 若く美しかった人々も昔日の夢が破れて 何が心に残っているのか……。

〈2〉 迫田

僅かな水も生かして使う為の田んぼが迫田と言う。家からオヒツを運んでの農作業の昼時に多い田を数えてみる。おかしい一枚足りんど……首をかしげても一度指で目で追う。『よーい一枚ねーど』そげんはずは……ちゆう見回したところ何とオヒツん下に チョコッと一枚あつた。それぐれー狭い田も。

〈3〉 法泉寺橋工事

明治ん始めに熊本県道が開通しち法泉寺にも長え橋がかかる。名づけち法泉寺橋じゃが諏訪村ん村長が意地う見せち ふとーないいい橋うかけた。西大分かる馬車じ運うだ白い石 工事ん人夫が入った石風呂も今でんある。そん頃ん金じ二万円じゃつたきふとーな工費。石組みが美しい橋は下から見あげてん素晴らしい眺め。

小岩戸 下詰向と三つの石橋があるのん当時の石工が技術がいいからじゃろう。

〈4〉 青タタミ入賞

昭和3年に大分県青タタミ品評会があり野津原からのものが4位に入った。野津原でんシットゥイが作られちよつたが 恵良の縄工場じ作った品がよかったんじゃろう。重労働じゃつたシットゥ作りでん嬉しいニュースもあった。

〈5〉 荷がおれた

牛馬の背から荷を下ろすとほっとする。大きい行事が無事に済むと『荷がおれた』ち言うのもきっと 安堵した重荷から開放されたからだろう。産が安かった 骨が折れた 苦がなかった なんかも荷がおれたに結びつくごたる。すべてが旨く行ったとも解される。そんな言葉ん交換には相手をいたわりその労に感謝する気持ちも。

〈6〉 99谷

食べ物欲しさに人間と約束した鬼は99谷を夜明けまでに 作ることになった。大水の度に道がふさがれるのでの苦肉の策である。夜がうっすら白くなつたとき見て吃驚した。99谷がやんがち出来あがる。土地んしはあわてちバツチョロ笠を叩き鶏ん鳴き声をあげた。それを聞いた鬼は我破れたりと断念しち海を渡っち逃げたとか。水難かる護っちくれた鬼に感謝し恩は忘れんごつしよったとか。

〈7〉 半夏至水

雨ん少ねえ年は天水がかりは田植えがでけん 七月になっちえーと俄雲に乗った雨が半夏至雨。こん雨じ田植えも畑もウルオウきち農家んしも自然も 拾うた苗でんありつきがいいち神様ん恵みじゃろう。

〈8〉 水けんか

土用前に雨が降らんと水けんかが起こる。水の取り合いが思わぬ発展にも。井手尻にゃ水がなかなかながれんき 上ん方まじシカケニユク行きえーと来たかち思うと すぐ止むるしが居る。急に止まったき走っち行くとイビに栓がしちやる。「くそー」歯ぎしりしち栓ぬ引き脱ぐと反対んイビに藁うつめくーだ。

何回か繰り返しついに対決になった。鎌う振り回しオーコじ叩きあい周りん者が中に入っちえーと納まった。一粒でんほしい気持ち秋まで続く宿命。

〈9〉 田植え唄

田植え準備 麦ん取り入れ 雨になると田植えと続く農繁期。まさに地獄そのもの 早朝から夜星まじ……そげん時唄うんが田植え唄じ手早えしは調子に合わせち倍は植ゆる。牛馬も植代がすむと一斉に植えゆるきーはかどる。「腰の痛さにこん田の長さ」降れば濡れ照れば暑い水の中の仕事にゃ 濡れ着物や半乾きう着ることも。汗にまみれて50日あまり そげな中に心慰めちくるるから唄うんじゃろーし それじまた休まることも。

〈10〉 配水所

水のわかされじ水喧嘩がはじまった。水うちつとーでんほしい声が大きゅうなり遂に大分かる巡査が来た。まつ白い服サーベルさげち…どうやら水不足ん原因は工事んセメント を横流ししたらしいごたる。水のぼりん多い事も表に出たが争いん方向が代わり ホコウ納めた。こんだ工事関係者が絞りあげらるる番に 果たしち跡味がよかったか 水ゆえに悩みも多い。

〈11〉 小作人を

貧富の差がひどかった頃小作人を哀れんだしがある反面 いじめた報いを受けたしも多い。米ん出来が悪い麦じえーと許しちもろーた。長雨もあつたが麦もゆう出来 米もいい按配に。田植えん間に早く地主さんの家に起きちよらんき いっとき待つ。用便じそりゅ見た地主『こげー早うこしゃくな』 知らんふりじ玄関ぬ開けんじやつた。

朝飯も食わんじ来たが納めにゃ家にも帰られん 待つ間に汗は流れ土下座した足からは無情なアセモも 連絡を受けた家族や近所んしの協力じえーと納めた。戸板に乗せち帰つたが息う引き取った。それかる…艱難辛苦…子供も成長した。地主ん家じゃ子供が生まると一年ぐれーじ死去する。三人も死んだあと自分も大病になる。『人をいじめたのでは』祈祷師にまともに言われたとか 七年もの長患いに苦しんで去つたらしい。

〈12〉 石だたみ作り

今畑のかさてに山の石を利用した石だたみがある。奉仕じ作る道じゃつたけんど念入りに。名主の検査があっち働き者が多いき出来ばえがいいち褒められた。ご褒美に村芝居が許され古老が脚本を書き 周りん村にも案内しち二夜の賑やかさ。石だたみを通るき踏みしめも出来た。お花も頂戴するし道は固まるしさすが名主。

〈13〉 墓掃除

盆の16日は墓掃除の習慣みんなじ話も弾む。亡くなった人の追憶も思い出の場所として。都合じこれんしや大きい墓を持つしやそこは思いやいながら楽しい一時に 心も通じ合う。習慣が風化する

るな一惜しいけど共同墓地なら無縁になつてん 誰かが掃除も香の一本でん立ててくれる。単独墓地に竹の根がニョキニョキじゃ栄枯の夢も浮かばれぬ。

〈14〉 のろしと役割

のろし台に煙りが上がると船が入る。鶴崎から熊本に帰る行列が着くとすぐ 久住に知らせる。苦役があつまり行列の役割も決まるが 一番先に着いた組は中心の共周り 二番手はそん後の道具の運び役 三番手は馬周りの役 さらに大道具の運び役など到着によつち 内容も苦勞も異なつた。久住まじの供をしち帰るな二日目 家人仕事は犠牲にしち時代の移り変わりが忍ばるる。

〈15〉 町づくりの人たち

宿場町野津原も明治に入り急速に人が集まる。大工 かし屋 下駄屋 染物屋 江戸期からの食料関係の店 宿屋と広がり生活にはことかかぬように。歩いて三里は片昼仕事でそんな至便な土地だけに 店が並び他地区からの人の入りもあり 医者も定着街づくりはさらに進み 寺小屋 勉学所 そして学校えと。

〈16〉 茶を植えたのは

太田の一角にキリシタン墓と見られるものが数多くある。九州西南部にお茶とキリシタンとの関連をよく聞くが 太田の城下周辺には茶が植えられている。太田の茶として名声をあげていた。諏訪郷の文化の中心地であつたらうここに 二つの物があることは 当時を忍ぶのに大きい役割を果たしてくれる。



〈17〉 ムチ焼き

正月飾りを10日にさげて焼いた火で竹先を焼くのがムチ焼き。田植え時期に牛馬を追いシビクそれでも怪我をしない……させない思いやり優しさの現われか。牛馬も家族と同様に扱う農家にすれば元気に働く願いがこめられてもいる。

正月2日には山に行くが「初山」と言う。初めて山の神に挨拶に行き一年の無事を念じ 関わりを大切にする心構えをする。ナンテン サカキを手折って帰る姿には初春ののぞかな 風情が。

〈18〉 寒行

寒に入ると僧侶の修行の一つである寒の行が始まる。かく家をまわり経文を唱えてその家の無病息災を祈念するとともに 自分の修練も重ねる冬の行事。年があけると無事に終わったお札を配る。身を切る寒さも修験の場では寄せ付けない。降るゆきに笠が隠れるような日にも仏の加護があればこそ。

〈19〉 水車

凍る間もなし水車というけれど ツララが輝くようにこびり着いている水車には今日も早うから荷物が来る。賃は現物から差し引くから気にならないが 嫁入りん決まった娘がくると皆が喜び祝い 励ましてもくれる。不安もあるが嬉しさもあるきもちがゆう解る。「心配せんでんいい頑張らにゃ」声が弾むのに引きこまれて「うん……」とこたえる横顔に 初々しさが美しい。粉をつけた頬には紅もさして里帰りする頃は いい嫁さん姿じゃろうと目を細める古老たち。水車の音と笑顔の優しさが周りをぼっと明るくしていた。

〈20〉 小作米

古くは地主に土地を借りた現物支払いで小作として 毎年納める物だった。涙の出るような厳しい年 年貢を負けてくれた年 地主懐深さが小作人を時として悲しませる。小作人も精一杯働いている田畑を守ってくれる そんな心の通う合いが大切だったのだが。

大事にしてくれた地主に農地解放後も決まって正月に米を送ったと聞く話もある。

〈21〉 木挽さん

おおきい割鋸が独特なスタイル 大きい松なんかでん割いち板にする技術者 足場を組墨糸をひいて寸分狂わぬ鋸の動きは まさに業師。歯にたまるヤニ取りにゃ石油を使うが 木挽唄が聞かるる庭先にゃ オカクズが小雪のごつ鮮やかに散る。

〈22〉 入れ薬屋さん

富山をはじめ薬の製造元からは泊まりがけじ 入れ替えに来る。大きな行李につめた薬匂いがすると愛想ゆう 笑顔がこぼれた。使った分を計算しち代金を払う すぐ使える薬じゃき結構使い計算すると『そげーもえ』ち言いてえぐれー飲んじょる。すかさず子供に嫁媚び喜びそうな風船ぬやると 子供は親の心配をよそに戯れよる。『もう昼じゃ弁当使いなー』『そうさせちもらおーか』少し方言も混ぜちいやと言わぬ心配りは さすが達人商人。『ばあさん甘酒出しゃいい』『そりゃーおーきに私の大好物』そつのない言葉巧みな話法に薬代の高いのは もう忘れたごたる。各地の情報も話す交流のアドバイザー。隠密にも利用したとかしないとか……。

野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

神 仏

9 神仏

1 久住系にあつた寺

かつて地福寺のあつた所は久住山の流れの末端であつた所 久住を司る天狗が錫杖をふって その響く末端に堂を建てたと言う。太田のここと川を隔てた向こう側に 鶴見山かな流れ出た土地の末端にも天狗が現れ 川を挟んで世を語り暮らしを按分したとか。さらに南から阿蘇の流れが迫り ここに三つの流末が集まったわけ。

2 智竜の水

諏訪神社に流れ込んでいる水は諏訪の森から湧いている。奥の院の井戸にも近くに住む人たちの家にも 石板の上を流れ下って利用されている。美しい水を口に含むと大自然の有難さも味わえ 木陰をくぐって口に吸い込むと 長い歴史の夢がパッと広がる。

3 光明が輝いた諏訪の聖地

諏訪神社を奉じて下向の際この地に着いた時 貝殻岳からの光明を受けた。その光る先が諏訪の方の森であつた為 ここを鎮守の森とした。一里のところ近くに引き寄せたかったのか 古くは船のついた故事もあり貝殻などの地名もロマンがある。

4 奥の院あれこれ

奥の院は西側にあつたがまん前に 乗り越えの日向瀬があつて馬の尻が見える為心乱し 馬の事故が絶えなかった。古老がこれを知るや奥の院を移して以来 事故もなくなった。奥の院も諏訪の森の中を望んでいたが それは入れられず山寺奥の院になった。



5 諸仏集合地

ダムに手の届くような高台に諸仏の集まり場所がある。ダム建設の折に水没地帯となる地にあった仏たち 古くから人の願をこめられた野仏。移り行く世相を諸々に語っている。高貴な形や素朴な型一つ一つに昔日の思いが甦る。対岸下竹田の一角にも寄せられた仏が並んでいる。四季の山野草が咲くこの地には尋ねる人もまばら山の持ち主が手を合わせ草刈りするのか 時代の流れの中で。

6 野仏

苦難から身を守りそりその願い叶って奉られた野仏 自分だけでなく多くの人に祈ってほしい気持ちがあって 奉られるのが多い。子供の無事を念じマイダレや赤いズキンも 野だから調和する。風雨にさらされて尚 人々の安らぎを念じる今日も又。

7 南無地藏菩薩

片草入り口の一隅に地藏菩薩が他仏たっている。ここでは特に南無地藏菩薩と刻まれてある。大衆の悩みを救ったとされる仏熱心にお参りする 女性が香を焚き花を替えている姿は無心とも言える。仏の智をうけて世に尽くす気持ちは ご利益が形となつて現れたのかもしれない。

8 鷲が城の守護神

毘沙門天は鷲が城の守護神であったが のち西福寺に移転された。12月2日3日には祭りがあるが 地区の人たちも守護の恩恵に預かりたい願いも 込められているのだろう。江戸中期の作とか檜づくり玉眼いりの仏。邪気を踏みつけている。

9 記念大師堂

明治35年四国の霊場巡りが出来ない人の為に 88か所の札所を作り以来毎年巡拝する記念に 建てられた大師堂は原村の鳥井野の高台。開設には今市万生寺 入蔵円福寺 大分臨濟寺の住職が参加している。春の巡拝めぐりは風物詩。1日霊山寺から…8日南岳寺まで毎日多くの人に参加して。

10 山峰経塔

経塚とも呼ばれるこの塔は甲斐の国の高僧が 経文と法衣を箱に納めて埋めたと言われる。山峰生まれの人が京都修行中に甲斐国に要請されて 武田信玄の菩提時ある恵林寺に入ったとか。

11 88か札所巡り

大正9年に建てられた大師堂《9に関連》を基地に春の88か所巡りはみな白衣に巡礼姿の人たちが レンゲ ナノハナの野道に鈴を鳴らして般若心経を唱えながらの 8日間。記念碑の一枚岩は力持ちの男女がコロを敷いて引いたと言う。一寸ずりの動きに見る人もため息いっぱい。高さ一丈八尺 重さ3000貫 幅九尺。

12 コウシン塚

地域内に肺病が入らぬように そんな願いをこめて建てられたであろう。鶏と猿それにコウシンが掘られた碑 古くは肺病に悩まされての厄よけ。地域に入るのを恐れて神仏に頼る心の現れ。世のうつり変わりに祭りの形にした時代も。かつてはみんなの願いが込められていた事を寺僧が 代役として奉仕する。石に掘られた石仏を見ると言葉には出さないが無病息災を念じているよう。

1 3 逆修墓

太恩寺に石垣原戦争を前に生前に建てられた墓。厳しい覚悟の心で後世に残す死を決意した 人の気持ちの現れ。慶長5年に建てられたが石垣原合戦の2か月前のこと。なでどうして誰がここに建てたのか 大きい石を使い…語ってはくれないが。

1 4 毘沙門まつり

当番が集まり接待用のケンチン汁を炊いて参拝者に。城の焼け落ちと共に恵良の田んぼ脇に やがて西福寺山門脇に奉られて以来 厄除け火伏せ五穀豊饒を願って奉ったとのこと。財宝招福子守戦勝も霊験ありとか 12月の行事は農繁期の節目の頃でもあり 手近な材料を使って栄養価の高い食べ物の接待 貧富の差のない平等の心も。

1 5 加藤神社の鳥居

野津原神社は明治4年に平野祇園神社と 法護寺の加藤清正公霊を合わせて奉ったのがはじまり。郷社野津原神社となったが鳥居に加藤神社が一基ある。かって加藤領地から細川領地が変わった時 細川式施政を入れたところ加藤系の豪族が 行政拒否にあったこともあり 加藤清正に対する力があまりにも強くて。そんなじ史実がこの鳥居にも現れたのでは。

1 6 地藏様のマエダレ

辻の地藏様に又赤いマイダレがかけられている。多くの願い託して供える花や菓子季節の変わり目には 赤いヨダレカケがよく取り替えられていた。僧の赤い衣に共通するとか赤い衣をつけ 願いご

とを念じてほしい気持ちで 目につく場所に建てた人も多い。

17 宇曾山修験場

武芸百般によく使われたが1400年代の熊谷指南は 剣だけでなく棒 槍と各方面にわたっていた。昼の仕事の忙しい小者たちは夕方の時間に駆けつけた。門下生は地元のほか大分 谷 別府なども。又指導されたこと一済漏らさぬ事の念書もあり 武芸は大正まで続き 戦前の出征兵士の護身用に指導も。女人禁制の山の掟もうなづける。

18 めぐす不動

めぐすかる入蔵え行くにゃ坂道う上ると不動様がござる。全てん悩み苦しみう聞いちくるる。大日如来の化身とかそん頭に置いた岩に榎ん木が根を張ちよる。すがる人ん思いを叶えちくれたのか。今日も香がタナビキ花が替えられちよる。木陰の坂道と赤い不動岩コントラストがゆう調和しちよる。

19 千巻心経

近所んし子供も集まっち千巻心経をあぐる。10人集まりゃ百回じ千巻になる。約5時間ローソク線香を継ぎ足しちはじめは調子がいいが 途中かるスピートも落つる。足が痛うなり声がかれちもう一息いれにゃ。汗が人間の幅を採点しち修行ん厳しさが解る。えーと千巻がすむと満足感と果たした心の潤い。



20 糸棚観音

庄内から現在の場所に移りたい夢枕に立つた観音菩薩。家族が知らぬ間に予知したような時間に 奉持されち鎮座することに。靈驗あらたかじ参拝者が多く難病も加護されて 近くの医者が迷惑したのか訴えじ観音は捕まる。ところが難病が発生大分の高貴な僧が身を呈しち 訳をきくと牢屋の観音菩薩の告げと言う。

早々に元に場所に返すと立ち所に 病人も平癒したので爾来観音菩薩は現地で奉られることになった。

神仏の物語は沢山聞き 資料も見せて頂いたが奥が深く架空な問題もあって 20だけにしました。言い伝えや又聞きもあります。案外知られていない事や気づかぬ物など 野津原には記録の文献が少ないだけに 参考になりました。

再度調査の機会には面白い物を堀起こして 文献として〈架空でもよい〉残して置くことも大切と思います。ふるさとに残る物語は先人の苦勞 努力によって生まれ育ち受け継がれた 大事な宝だとおもいました。



野津原放言集

付録 乙ぼねばなし

夢と鳥

★10★ 夢とロマンを求めて 1 瀬戸の砂まき

杉木立ちの夜道を一人歩くと砂まきが出ると言う。怪物のいたずらか物取りか それとも動物のうごめきで落ちるのか。火山灰地の多い瀬戸は風にも灰土が舞い 人の心を悩ませる。灰土穴の地蔵様は惚れ地蔵。好きな人にその灰をかけると願い叶うとか 乙女心をくすぶるような伝承は 幸せになった人がきつと伝えたのだろう。

2 肥後領飛び地

参勤交代には小倉経由もあるが野津原経由で 鶴崎に出るのが一番利用された。でも岡領 天領なども通過するから予算もかさむ。でも飛び地ながら大半は自国領だから 行列の組方も工夫がされて経費の削減も出来た。ソバの馳走や応分の寄贈など時として心の交流も。飛び地だからと粗末にはせずむしろ大切に施政 が領民の生きがいにも結びついていたようだ。

3 水番小屋のモクセイ

水を護り公平に分配する場所が水番小屋 秋には香ぐわしい花モクセイが匂う。疲れを癒し心を和ませて夏の暑さが少し減ると季節を満喫させてくれる。水喧嘩も口論した日も過ぎれば米を作る為の苦勞。モクセイはそんな歴史を見ながらそんな運命の農家に同情し今年も秋の実りを迎えるようだ。

4 清正公の御輿

7月24日は清正公の命日に若者に奉仕されて 地区内を巡行する祭りがある。僅か30年余の施政者に敬愛の心が通じ合う 今も盆に帰らずとも祭りにはと人の心が 生かされてもいる遺徳

に幸せも感じるのだろう。幻想的な提灯の灯に映し出される姿に故郷のすばらしい夏の 喜びが味わえる大山車との共演。生きた人生哀感が嬉しさに転嫁されて 心も弾む祭りの夜。

5 カンカラ餅

日ざしが厳しくなると祭り行事に餅がカンカラに乗る。素朴な姿の香り長い間受け継がれた生活の知恵。殺菌力もあり夏の香りが食欲もそそる。他の物にもつかないから《迷惑かけぬ装い》心にくい。葉っぱは生食しても胃腸の為によいとか 夏の食あたりよけにもなるとか それを合わせて差し出す心配りまさに故郷に根づいた 人情そのもの。黄色になるのは薬効で味の引き立て役にも。

6 鬼と天狗の名勝負

雨のふる度に畑が荒る 古くから住み着いちよる天狗は心痛めちよつた。空腹じ山を下りち田畑を荒らす鬼う見ると天狗は一計を案じた。一晚じ100本の谷う掘りゃ食べ物い不自由させんち 約束した。びっくりしたな夜に99本掘りあげちあとすぐ出来あがる。天狗はたまがっちトキン声うあげた。『しもうた』鬼は負けたち思うといさぎゆう山を下りた。天狗は居てほしいち言うたが勝負は負けち 本当の勝者は誰

7 芝かき払う

小雪舞う山でのカズラ引きは辛いが生活の糧の 青年は今日も山にはいる。雪道をトボトボと見すばらしい老人 もう何日も食べていない風体。腰を下ろした老人に近づくと粟飯を勧めた。固くなって旨いとはとても それをいかにも旨そうに食べる老人。

残りも無理に一つ持たせて見送った。坂の下までつれない別れようと振り返ると 『せめてものお礼です』 と雪の積もったクボを指さした。すーとかき消すように消えた老人……言われたクボに行くと山 芝かき払って見るとカズラが山ほど積まれていた。神か仏かあとをじっと見やって両手を合わせた。

8 力を貰った男

宗方弾三が宇曾山に仏像を運ぶことによって力を授かった。一丁ごとにある仏像は一体十貫ぐらい一夜のうちに運びあげた。始めはオモシロ半分にせがったが 本人は真面目に運び出したので もし力を授からねばどうしょう と心配した。運び終わり本殿前で『これから大阪に行き相撲とりになるので力をください』 と懇願して上阪した。やがて出世して当時そそのかした人たちも恥じたとか。

9 七瀬の友

明治40年4月に発行された2号で中止になったが 当時の諏訪野津原が合併して大分郡内一の広さ 人口6000人と記録。農会長は佐藤軍八 助役は小野応倉 『七瀬の橋』と題した詩もある。そのほか通信 医学 青年会の余興 当時の社会面 人情の一面も覗かせていた。

10 双石城今昔

東北面に高い崖南は土の谷で敵を防ぎ落ちない城であった。世相の移り変わりに人の動きも変わり かつての城も戦火が繰り返して情勢が変化 やがて出城の役だけとなり自然役目も少なくなった。わずかに土塁の残る跡が昔日の物語を語るように。

1 1 砂礫岩

吉熊から下谷 安友谷 塚野谷にかけては砂礫岩が多く 古い時代に阿蘇噴火のあと隆起したものである。大字野津原あたりは海であった。このあたりにのみ多く見られる石の集まりには 磨くと誠に美しいものも入っている。長い間の地中生活から熱せられ隆起したとすれば 吃驚して美しくなったのでは。

1 2 方言の中の言葉

里の方言の語尾に『なあ』と少し上げる使い方があ。海上を通じて瀬戸内や京文化の影響か 竹田岡領の今市から入った言葉か 小藩分立の豊後の中で美しいこの語尾のある言葉は 方言の中でも優しく人に呼びかけるよう。『ぬくい』と言う言葉は京方面でも同じとか 早くからの文化の流れも伺える。

1 3 清正公の大山車

豊後三大祭りと言われて賑わう 迷惑かけないように郡役所に区长連名で届けを出すと 当日役人が出向した大山車の引き立て。囃子踊りの届も 宵祭りから二夜引き立て子供の太鼓三味と子供歌舞伎の上演。戦時中は引き立ても中止したが戦後復活した。

日露戦争の戦勝記念に作られ素晴らしい飾りが施されていたが。

1 4 御座岳に剣

九州平定の帰りに日本武尊は御座岳に立ち寄り 一夜を過ごし祠を作り剣を納めた。その剣は後障子岳に移し宇曾社の創建と共に社に納めたとか 当時の思いをこめて御座岳には祠が残っている。

15 地から生まれた宇曾山

昔山ゆれがあり突然ニョキツと地面にせり上がり あれよあれよと見ているうちに丘が出来た。それが毎日のように背伸びして姿のいい山が出来た。ウドウムドウしたき宇曾山になつたとか。砂礫岩地層は底に穴があるのではと心配する そこじ温められち別府に出ちよるとか。

16 天狗の住む山

山の中腹ん松ん枝かるヒラリ じつと見据えると又こっちん木かるヒラリ。次ん日古老に話すと天狗さんぬ見たんか 力がつくどち言われた。吃驚した若いしが藁打ち石う抱え上げた。なんとラクに。やつぱそうじゃつたんかち。病人の声う聞くとスーと現れ病気う治す そげな修行をしようたんじゃろう。

17 鶴見山

『鶴見山が宇曾山ぬ嫁にほしい』申し出があつた。集まっち相談湯布山に断りい行くと急に泣き出した。そん涙が地に入り熱い湯になっち地上に噴き出えた。切角ん話に受入れんじゃつた宇曾山にゃ湯はでらんままになつた。夫婦になつちよればこつちにん湯が出たかんしれんが。

18 夜ばい

年頃ん娘がおると夜にゃ男しが忍びこむ。親もそれとなく見ち気に入る相手なら黙認もする。習慣が時には追いまわされたり反対に親が セガワレタリ肥桶に足うつっこんだり。雨戸開けるに小便ぬしかけたり嬉しさと不安と娘心は揺れている。

19 神楽の練習した場

実五郎は神楽を習っての帰りに大峠で練習を始めた。5日あまり泊まり込みじゃつただけに早う皆と覚えにゃち。基本は同じでん組合わせじ仕上がりが違うちくる。纏めあぐると3日はず眠つちしもった。道具衣装も何とかでけたき地区んしに披露。神楽社も作り野津原神社の宮神楽としち引き立てちもろうた。

20 バクチ穴

昔鬼が住んでいたと言いふらしち人の行くんを止めちよつた。谷くぼにホラ穴があっちタイマツん灯に映し出されち穴バクチが始まる。近くん年寄りが集まる場じゃ諸肌脱いじ遅しい男たちが勇ましかったじゃろう。地域ん世話もゆうした学も財も価値観もあるしのじょうんごたる。

21 名前ヲをつけた一本の矢

上詰ん高台かる下詰に向けち矢を放つた。広大な土地にゃまだ名前がね一き下に詰るき下詰矢の羽が落ちたき原村矢が落ちたき矢の原竹が落ちたき竹の内大けな田があつたき太田物う貯めた倉があつたき岡倉ちつけた。そのまま野津原に落ちたら矢着くとでんつけたかんしれん。そりゅう見ち目をこすつたきめぐすになつたかん。

22 酒は白鶴

倉にモーソー竹が立つと酒の仕込みが始まる。矢野原の酒屋で例年のように寒酒つくりが若いしにより進んでいる。樽につめ升じ計る酒徳利う小脇に抱えち子供が買いに行くとき草履ん音が響く道。

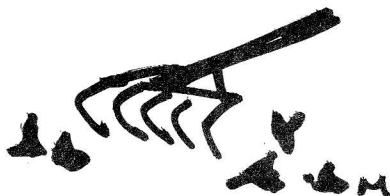
湯気がたち酒独特の匂いに馬車を引く人たちがつい 足をとめる。角うちじグーと一杯引っかけち温見に上つち行く。馬もゆ一知つちよつち飲みつけん店屋ん前じゃ立ち止まる。店んしもそこは心得たもん 馬にもちゃんとニンジンやるなゝ忘れんき。

23 落人たちの夢

源平の戦に破れた多くの人が住み着いた それを機会に武士を捨て土造りに変わった人たち。プライドは心の奥に秘めて同族同志は祭りに集まり すぎし日を忍ぶ。遠く離れた第二の故郷となった地に 小作や苦勞の繰返しにも甘んじて。先祖祭りに舞う一時には武士の魂もモロにさらけ出して。里人とのふれあいも自然と進む。

盆踊りの功德に先祖を敬い 時時の節目にきちんと供養をすれば自分の意気様もやがて納得も出来るのだろう。古きを捨てざる勇氣も時には必要だから 重荷にならぬ生き方が自分の幸せも約束してくれそうだ。人間一人の力は弱いもの人に支えられて生かされるから たった一度きりの人生を大切にすることが 自分も大切にされている事になる。

あれから何百年も過ぎた過去は 思い出の花ロマンとして夢に託して これからの人生を有意義に過ごすことこそ 幸せ人生だろうと故郷の景色自然美しい人情に 甘えていつまでも心豊かに生きたいものです。素晴らしい故郷に巡り会う宿命それは貴方の運命がそうさせたのです。感謝して明日は今日よりしあわせに。



あとがき

ご愛読誠に有り難うございました。これからこの種の研究収集などをされる方々の お役に立つとすればこの上ない幸せです。お気づきの点がございましたら ご指導頂きますれば これからの調査に参考とさせていただきます。方言の温かい思い出をそっと抱いて。

方言調査会編集一同

暑さにへたばりながら冬の寒さに ヨダキーナエ と愚痴も出たけれど 足掛け7年間頑張った集大成の『方言集』振り返ると多くの人の代理で まとめたに過ぎない取り組み作業でした。故郷の重要資源無形文化財が消えてしまう 直前の機会に恵まれて調査した 生きていた証を残す そんな悦びも感じています。

集めなければ消え失せる時 出会ったのも宿命でしたが そんな企画に 影から多くの人が支援協力してくれ 目的を完成させた嬉しさは 金や物では変えられない宝です。故郷の夢とロマンとして残るさまざまな言葉 物語 諺 伝承 民話 唄などこれからも大切に 守り育てて行きたいものです。史実にないかもしれない 違う事かもしれない 本当はこうだよ。そんなご意見もあるでしょう だが 調査収集の中で心に暖めていた話題 思い 聞き伝えなどは その方の心を大切にそのまま記述しました。それも夢があり故郷を愛するからでしょうから……

方言調査会編集責任者

佐藤源治

